

内申書は公開されねば

前回、「内申書は凶器にもなる」と書いたが、よくぞ言ってくれたと数人の方からほめられた。進学、就職などの試験は選抜であるから、まずフルイにかける。そのために受験者の不利欠点が探される。ここで内申書は決定的役割をする。最終段階でもなお同一成績者が余分に残ると、ここでまたそれがものをいう。

内申書を書くすべての教師が善良公平であれば問題はない。しかし今は玉石混淆ぎよくせきこんこう。教員免許状をえさに学生集めの大学がそれに拍車をかけている。必要悪として内申書がなおも続くなら、本人の求めに対して公開することを義務づけるべきだ。そのみが凶器化するのを防げるからである。

教育は人間の可能性の上に成立する。悪わるでも善くなる。善も悪くなる。だから教育が必要である。棄すてられる人間はいない。これが見えない者は内申書を書く資格はない。

私も若き日、教員養成の師範学校（旧制）で内申書をたくさん書いた。教師になる

者にはいささかの欠点も書けなかった。敗戦直後は受け持ちにも窮迫退学寸前の学生が少なからずいた。それらも日本育英会のおかげで皆卒業できた。それには学業成績・内申書がすべてだった。だから、彼らを成績一位か首席を争っているなどと、つくろわねばならなかった。

某日、本当の一番が私に詰め寄った。私は言った。「君は本当の一番。知らん顔するのは貧しい友への友情だ。君に損はない」。荒っぽい話ではある。

(一九九二年十二月二十一日)